

5.12



Nursing Day

## 令和 8 年度看護職の体験談 忘れられない看護エピソード

5月12日は「看護の日」です。

富山県看護協会では「看護の日」にちなみ、平成20年度から「忘れられない看護エピソード」を募集し、今年度は74件の応募がありました。

作品はいずれも、看護の本質とそこに携わる人々の懸命な思いが伝わる温かなメッセージにあふれています。

ご応募いただきましたエピソードの中から、受賞した6作品をご紹介します。かけがえのない「看護」という役割を多くの方に知っていただくきっかけになれば幸いです。



「看護の日」キャラクター

かんごちゃん

### 受賞者

会長賞	齋喜 弘美	(富山県済生会高岡病院)
優秀賞	河合 美奈	(高岡市民病院)
	藤田 香里	(富山赤十字病院)
かんごちゃん賞	五艘 日佐樹	(富山県立中央病院)
	伏間江 瑠奈	(真生会富山病院)
	米澤 萌	(富山労災病院)

公益社団法人富山県看護協会



## 柚子の香りの中の思い出

富山県済生会高岡病院 さいき ひろみ  
齋喜 弘美

現在、看護師 19 年目になる私には、10 年前に出会った 70 代の慢性心不全の患者さんとの忘れられない思い出がある。その患者さんは下肢浮腫が強く、自分で足を動かすのもやっとで、足を動かすたびに表情を歪ませ辛そうであった。私は日勤帯にその患者さんの担当となり、浮腫の程度を確認するために下肢を触診し、観察し、他愛もない会話をしながら下肢を撫でていた。その時患者さんから「あなたに手を当ててもらっただけで楽になる」と言われた。そして「楽になったお礼にこの柚子をもらって欲しい。私の家でなった柚子なの。私は柚子が好きでね、この香りを感じるだけで幸せになる。でもあなたの手のおかげで柚子の香りを感じるのと同じくらい幸せな時間だった」と私に笑顔を向ける患者さんの姿があった。この患者さんと過ごす時間は短かったが、柚子の香りと共に爽やかでとても穏やかな時間が流れていた。

この時の患者さんの言葉は、私が看護師を目指すきっかけになった言葉を思い出させてくれた。「看護」って言葉は「手と目で見て患者を護る」という言葉だ。私は高校生の時に将来の夢について悩んでいた。私はこの言葉を知り、看護という仕事に惹かれ、興味を持ち看護師になった。看護師になってから日々の業務に追われ、余裕がない日々が続く時もあった。看護師経験を積むにつれて自分の将来に不安を感じることもあったが、この患者さんに出会ったことで初心を思い出すことができた。

「看護師の手と目は患者を護ることができる」。私はこの言葉を心に刻みながら、今は看護師長として患者さんの安全やスタッフの安全を考えながら病棟管理・運営に日々邁進している。時々、行き詰まることもあるが、そんな時は柚子の香りを感じるようにしている。柚子の爽やかな香りが私の心を穏やかにし、看護師としての気持ちを初心に戻してくれる。柚子の香りの中で出会った患者さんとの思い出は、今も私の中で柚子の香りと共に私の支えとなっている。



## 小さな手のぬくもりが、 今も私の看護を支えている

高岡市民病院 かわい河合 みな美奈

看護学生時代、3歳の白血病女兒Aちゃんを受け持った。小さな身体に点滴のルートが何本もつながれ、ベッドの上で過ごす時間が長かった。それでもAちゃんはよく笑い、私を見ると小さな手を伸ばして「お姉ちゃん看護師さん」と呼んでくれた。その手を握るたび、温かさと同時に、守りたいという強い気持ちが込み上げた。学生の私にできることは限られていたが、体温測定や清拭、絵本の読み聞かせを通して、Aちゃんと心を通わせていると感じていた。

しかし、実習終了の2日前、Aちゃんは静かに息を引き取った。その知らせを聞いた瞬間、頭が真っ白になり涙が止まらなかった。3歳というあまりにも短い命の終わりを私はどうしても受け止めることができなかった。最終実習日、私は病院に行くことができなかった。看護師を目指しているのに、小児の死から逃げてしまった自分が情けなかった。そして何より、Aちゃんのご家族に実習のお礼を伝えられなかったことが、ずっと心に重くのしかかっていた。

後日、病棟師長へ挨拶に伺った際、Aちゃんの母親からの言葉を伝えられた。「学生さんがくると、Aはすごく嬉しそうだった。お姉ちゃんみたいだったんです」。その言葉を聞いた瞬間、抑えていた感情が一気に溢れ、私はその場で号泣した。師長は静かに、「受け止められないほど、真剣に向き合ったんだよ」と言ってくれた。看護師になってから数年後、偶然Aちゃんの母親と再会した。第2子を授かり、悲しみを抱えながらも、死と向き合い、家族で幸せに過ごしていることを話してくれた。直接話すことができたことで、心に残っていたわだかまりのようなものがようやくとけた気がした。

あれから25年経過した今も、Aちゃんの小さな手の温もりを私は忘れたことがない。家族の死、そして子供の死とどう向き合うのかを深く考えさせられた。最期の時まで後悔のないよう患者と家族の時間を大事にした看護をこれからも提供していきたいと考える。



## 未来の看護師へとつながる

## 看護の心

富山赤十字病院 ふじた かおり  
藤田 香里

「ありがとう」はただの感謝の言葉ではなく、看護師になって良かったと初心を思い出す言葉である。その先にある心からの笑顔は看護師にとって一生の宝物であり、これまでに頂いた数多くの「ありがとう」に私は今も支えられている。

数年前、A氏との出会いが看護の原点を振り返るきっかけとなった。助けを叫ぶ声でその場に緊張感が走り、心肺停止したA氏が横たわっていた。癌宣告直後の出来事であった。迅速な対応で蘇生したが、A氏は暗い表情で治療はしたくないと意思表示された。

そうした中でA氏は治療をすると意思決定され、治療開始となった。私は、A氏の心の声に向き合いたいと細やかな関わりを続けた。A氏は時折笑顔を見せるようになったが、心の表情は暗いままであるように感じ、少しでも心から笑顔になれる時間を作りたいと寄り添い続けた。ある日、A氏は「病室ばかりだと退屈だね」と話され、少しでも気分転換になればと思い、シャワー浴を実施した。シャワー浴を終えたA氏から「気分転換になったし、前向きに治療に臨めそう。本当にありがとう」と心からの笑顔で感謝を伝えられた。私は胸が熱くなり、「こちらこそ、ありがとうございます」と笑顔で感謝を伝えた。看護師になって良かったと改めて初心を思い出し、「看護は楽しい」と心から感じる事ができた瞬間であり、後輩にもこの経験を伝えたいと思った記憶が蘇る。高度な技術を身につけ専門性を発揮する看護もあるが、誰かの力になりたいと寄り添う気持ちが看護の原点であり、看護の心だと思う。

現在、「看護は楽しい」と心から感じる瞬間を経験し、看護の心を育ててほしいと願いを込めて看護教育を実践している。「患者さんにありがとうと言われ、胸がいっぱいになった」と笑顔で語る後輩の姿をみて、看護の心がつながっていることに深い喜びを感じた。この看護の心が未来の看護師へとつながっていくと信じ、これからも共に学び共に成長していきたい。



## 夜明けの髭剃り

### 医療の先にある「その人らしさ」

富山県立中央病院 ごそう ひさき  
五艘 日佐樹

ECU（救命救急治療室）に勤務していた頃です。当時は ECU と HCU（高度治療室）しかなく、救急搬送された重症患者の多くが ECU に集中していました。深夜勤務帯の朝方の ECU は、夜と朝の境目にあり、静けさの奥で機器のアラーム音だけが規則正しく鳴り続けていました。その日は特に忙しく、緊急手術後や高エネルギー外傷、心肺機能停止から蘇生後の患者さんが立て続けに搬送され、私たちは夜明けまで走り続けていました。

そんな慌ただしい朝方に、ある先輩看護師が意識のない患者さんの髭を剃り、丁寧に顔を拭いていました。当時の私は「今は命を守ることが最優先ではないのか」と、その行為の意味を測りかね、戸惑いの視線を送っていました。

私の視線に気付いた先輩は、手を止めることなく静かにこう言いました。

「この人はきっと毎朝、鏡を見て顔を整えてから仕事に行ったと思う。だからこそどんな治療をしても、例え意識がなくても朝には髭を剃るんだよ」。

その言葉は、夜明けの薄い光のように、私の心の中に差し込みました。どれほど高度な医療機器や薬剤が用いられていても、患者さんは治療の対象である前に、守られるべき日常を持った「一人の人間」です。朝に顔を整える何気ない営みは、その人がその人であり続けるための、ささやかで、しかし確かな証しなのだ気付かされました。

現在、私は緩和ケア病棟に勤務しています。患者さんが亡くなられた後、お風呂に入るケアを行うことがあります。やわらかな湯に包まれ、穏やかな表情を取り戻した姿を前に、ご家族が「きれいになったね」「いつもの顔だね」と語りかけられることがあります。その言葉に触れるたび、命が尽きた後であっても人の尊厳は静かに守り続けられるのだと実感します。

朝方の ECU で教えられた看護の心。それは今も私の中で息づき、人として患者さんと向き合う姿勢を支え続けています。



## その人らしさと価値観

真生会富山病院 ふすまえ 伏間江 るな 瑠奈

看護師になって1年経った頃、初めて終末期患者のA氏の受け持ちになった。A氏は予後数週間から1ヶ月と告知を受けていた。入院後、嘔気嘔吐や、疼痛、不眠など様々な苦痛が出現し、イレウス管の挿入や麻薬による症状緩和を行っていた。しかし、本人の望みは苦痛の緩和ではなく、余生を悔いなく過ごすということであった。その望みは自宅へ帰ること、大好きな海を見ること、好きなものを口から摂取することだった。この話を聞いた時の私は、終末期かつ症状の安定していないA氏が全ての望みをかなえることは難しいのではないかと感じており、何も返すことができなかった。その後、A氏の思いをチーム間で共有し、可能な限りかなえられるようにサポートした。期待させてしまうのではないかとネガティブな思いが大きかった。しかし、望みを叶えようと全力でサポートするチーム全体の思いを受け取り、いつの間にか私自身も諦めの気持ちを忘れていた。それから1週間弱という短い時間の中で吸痰や点滴交換など家族指導を行い、家族への心理的サポートを行った。

そして、無事に自宅退院の日を迎えることができた。退院後、A氏は大好きな娘さんと大好きな海を見に行き、大好きなアイスを食べ過ぎて過ごされていたそう。入院中はどこか苦しさや不安が隠れた笑顔が印象的で、私はその苦しさや不安を取り除くことができず後悔していた。しかし、後日届いた写真には自宅で明るく爽やかなA氏が映っており、笑顔が輝いていた。退院後も、何度か入退院を繰り返されていたが、A氏は自分らしさを忘れず、希望を持って治療に取り組んでいた。そして、予後1ヶ月と告げられた日から約半年後にA氏は永眠された。

この経験を通して、その人らしさや価値観を尊重した看護は患者の生きる活力になるのだと強く実感することができた。信じることで、希望を持つことの大切さに気づかせてくださったA氏に感謝している。



## 拒否の奥にあったもの

富山労災病院 よねざわ 米澤 もえ 萌

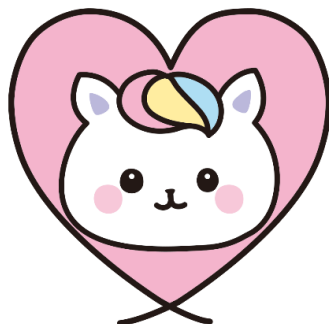
入職して半年が過ぎた頃、私は分からないことだらけだった新人期間を抜け、少しずつ看護師として働いている実感を持ち始めていた。そんな時期に、人工膝関節置換術を受けた高齢の女性の患者さんを受け持った。

術後、その方は強い痛みを繰り返し訴え、離床もなかなか進まなかった。しかし頓用で使用できる坐薬の鎮痛剤については「大丈夫」「いらぬ」と頑なに拒否されていた。痛みを耐える様子を見ながら、私は心の中で「使えばきっと楽になるのに」と思っていた。なぜ痛いのに使わないのか。その行動を、理解できていなかった。

ある日、雑談の延長で私はなんとなく尋ねてみた。「坐薬を使うことに、何か不安はありますか」。すると患者さんは困ったような表情になりながらも、小さな声で打ち明けてくれた。「うんちが出そうになっちゃうの。まだ傷も痛いし、トイレに間に合わないかもしれない」。その言葉を聞いた瞬間、私ははっとした。坐薬そのものが嫌だったのではない。排便への不安や、間に合わなかった時の恥ずかしさが、その方にとっては痛みより勝っていたのだ。もっと早く気づけていればという申し訳なさを感じると同時に、自分の未熟さを実感させられた。私はこれまで、痛みを和らげることばかり考えて、その方が何を不安に思っているのかを見ようとしていなかったのだと思う。

多くの患者さんを看護しなければいけない忙しい中、つい効率や看護師側の正解を患者に押し付けてしまうことがある。しかし、患者さんの行動には必ずその人なりの理由がある。その理由に耳を傾け、安心して治療を受けられる環境を整えることも、看護師の大切な役割なのだと、この経験が教えてくれた。私はこれから、患者さんの言葉や行動の裏側を知ろうとする看護師でありたい。

5月12日は



看護の日

看護の心をみんなの心に

「看護の日」

毎年5月12日は「看護の日」  
その日を含む日曜日から土曜日までが  
「看護週間」です。

看護の心、ケアの心、助け合いの心は  
今後の社会を支えていくために大切です。

「看護の日」はこうした心の認知・普及のため、  
近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの  
誕生日にちなんで制定されました。



【主催】公益社団法人富山県看護協会

【発行】公益社団法人富山県看護協会 富山県ナースセンター  
〒930-0885 富山市鶴島字川原 1907-1  
TEL 076-433-5251 FAX 076-433-5281

